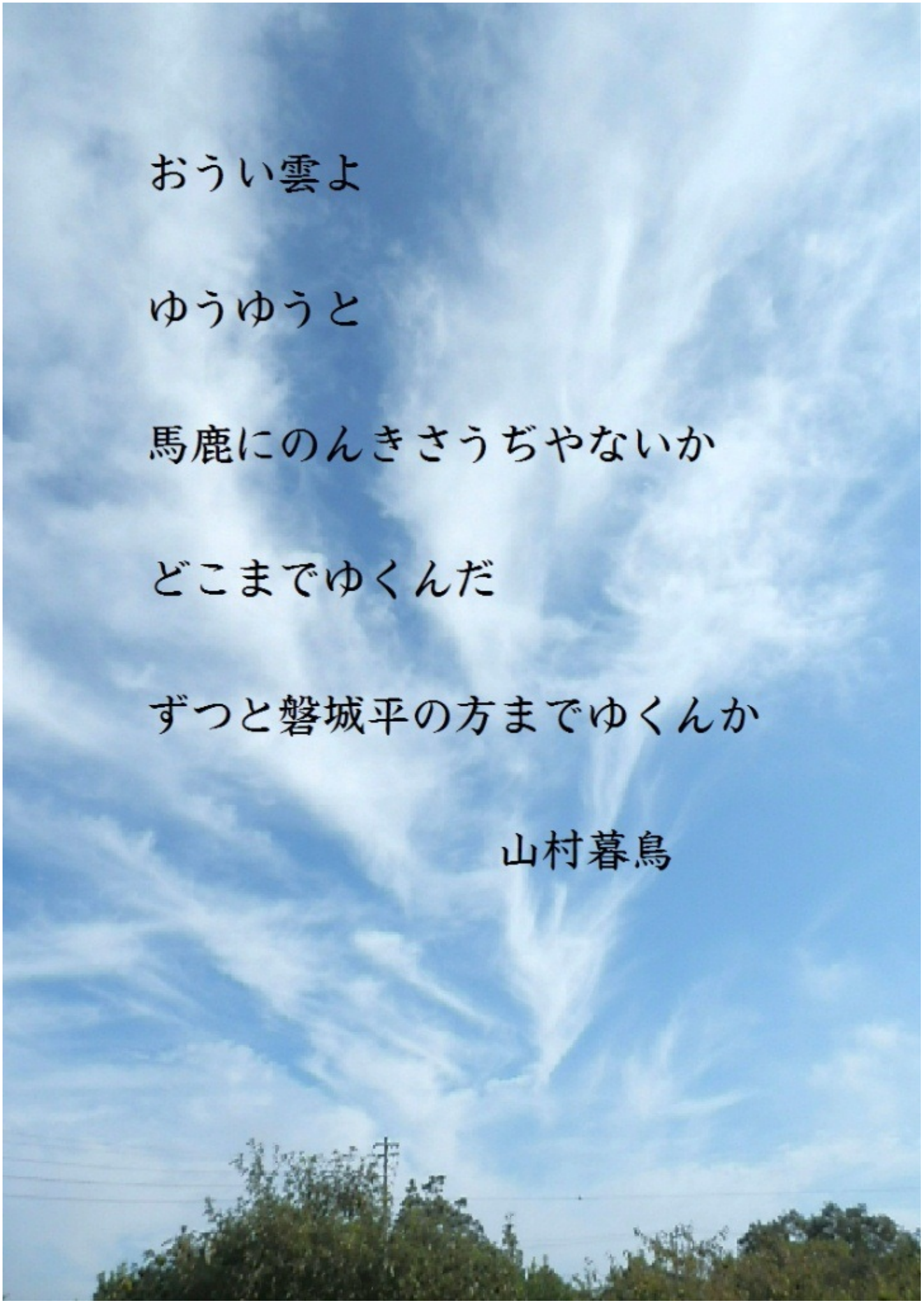
おうい雲よ

のんびり行こうよ。

2012年　8･9･10月

keisukedayo



おうい雲よ

ゆうゆうと

馬鹿にのんきさうぢやないか

どこまでゆくんだ

ずつと磐城平の方までゆくんか

山村暮鳥

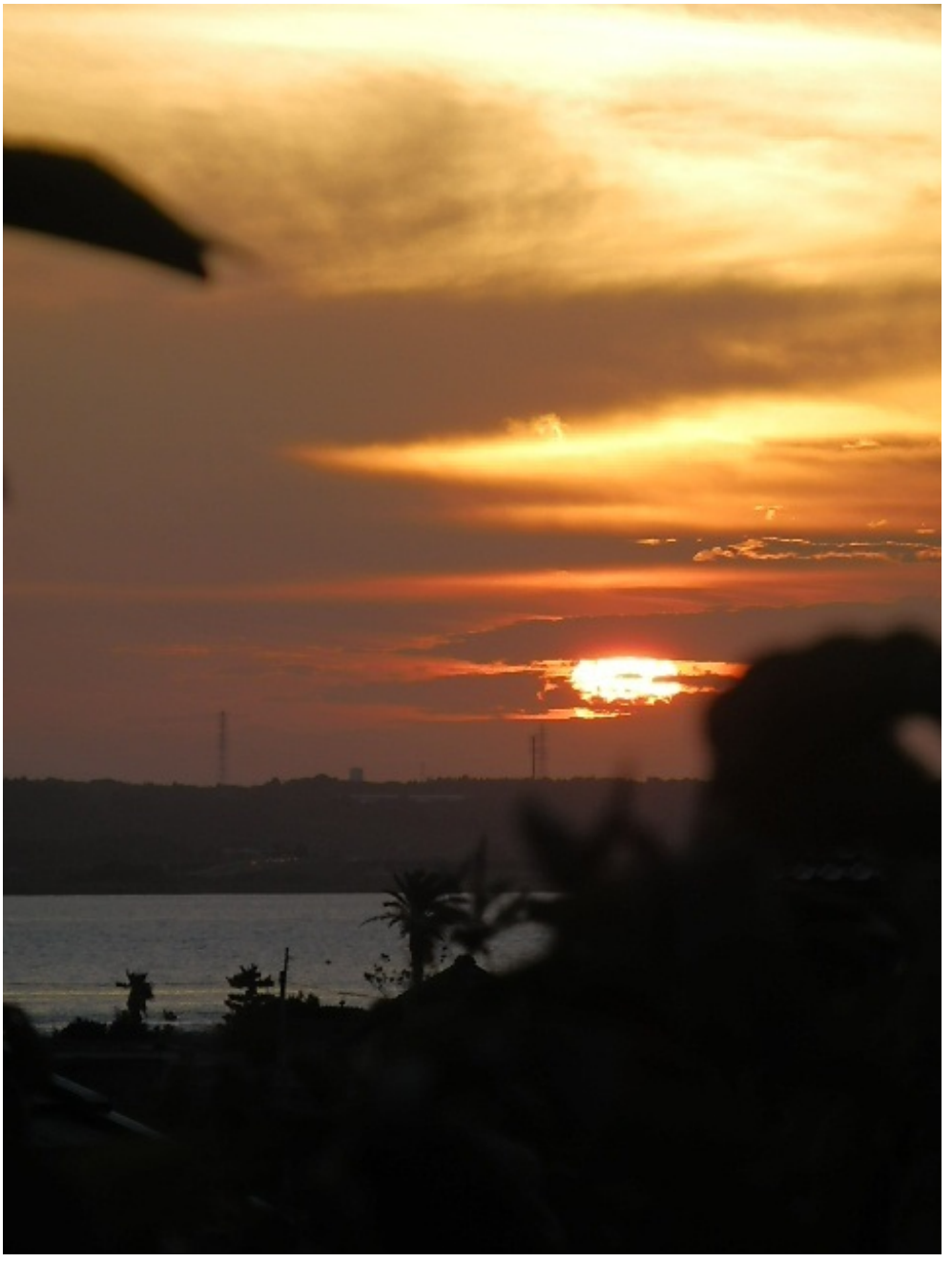
御覧いただき ありがとうございます。

子供の頃から雲が好きで、
時間があれば、ボーッと眺めています。
クラスの席替えでも 窓際の列になると
授業そっちのけで窓の外を見ていて、よく先生に叱られました。

明治・大正期の詩人 「山村暮鳥」の詩の一節から拝借し
タイトルを "おうい雲よ" と付けました。
今まで撮り溜めた写真の中から８月以降のモノを掲載し
１０月いっぱい随時追加していく予定です。

8月2日　18:45　利根川の夕陽

今日も一日お疲れ様でした^^



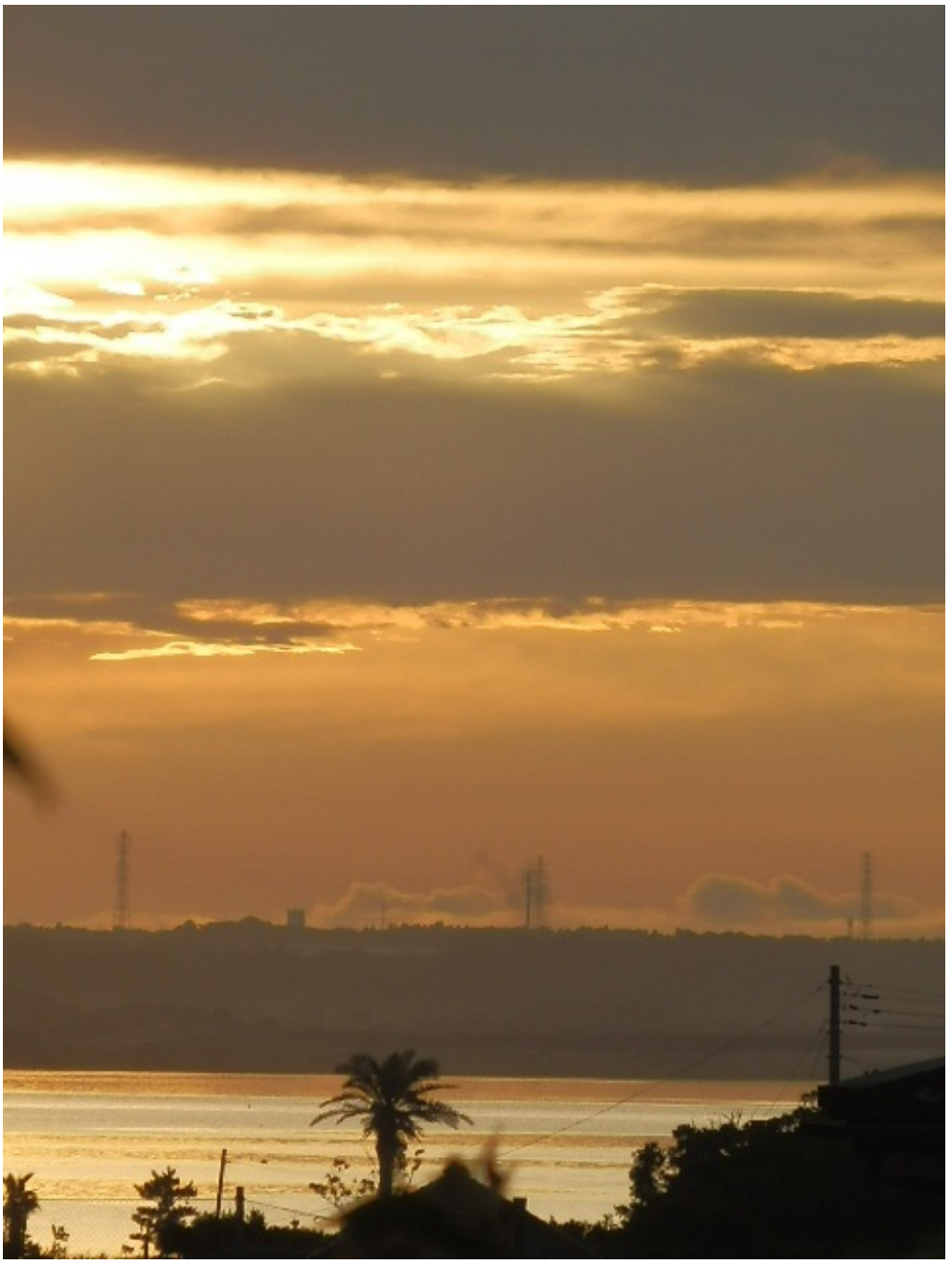
8月3日　12:43　利根川河口付近

8月3日　12:45　銚子大橋 上空の雲

8月6日 日の出直前

8月6日

8月6日　18:16　利根川

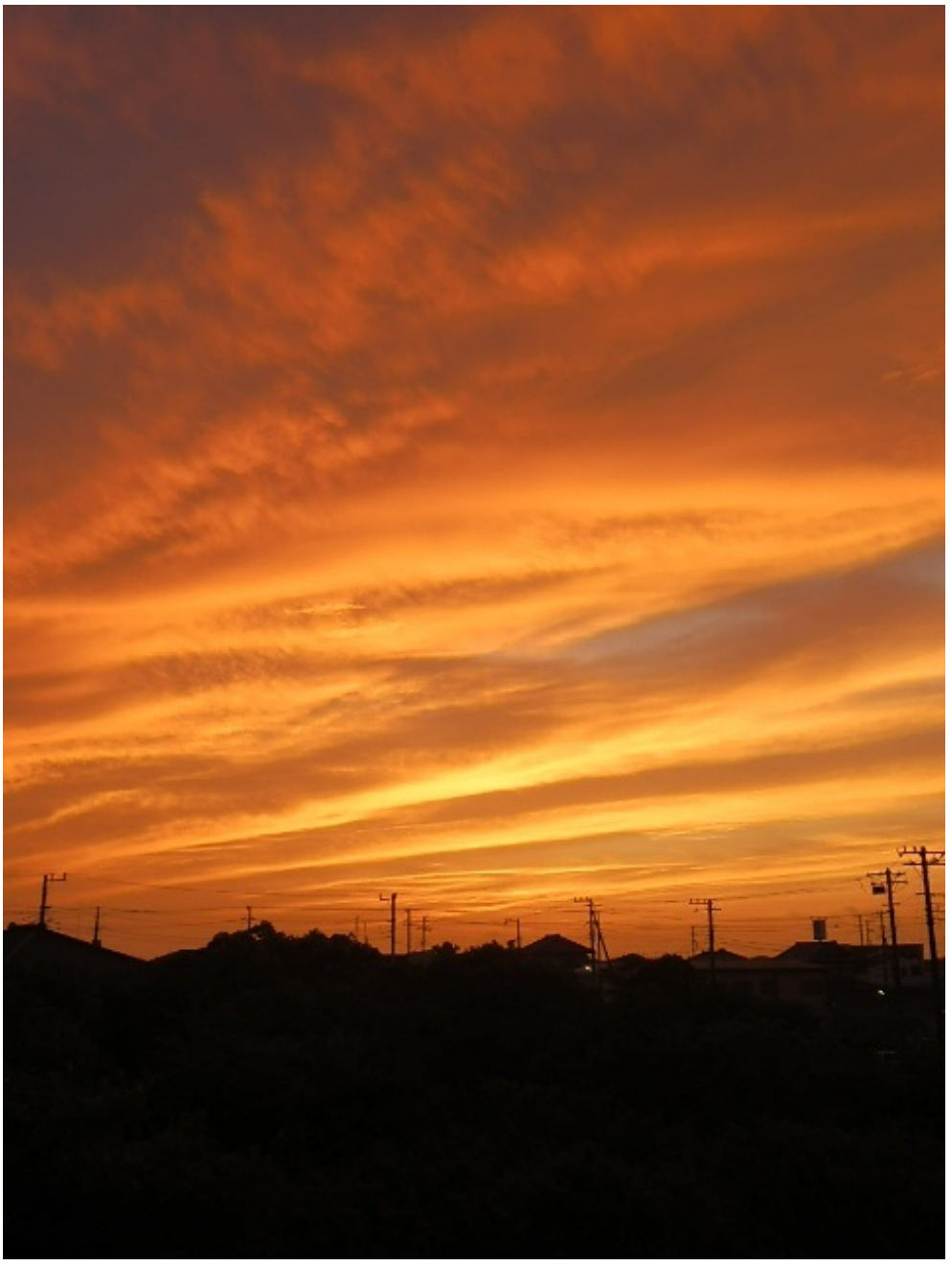


丘の上で
としよりと
こどもと
うつとりと雲を
ながめてゐる

　　山村暮鳥

8月13日　5:34

8月14日　4:45　朝焼け



8月15日　17:47

8月18日　13:55　利根川

8月18日　14:34　利根川

8月18日　15:04　利根川 ・ 夏雲

8月18日　15:06　利根川

8月18日　15:07　利根川

8月18日　15:24　利根川 ・ 利根かもめ大橋

8月28日　12:00　茨城空港

茨城空港 公式ホームページ

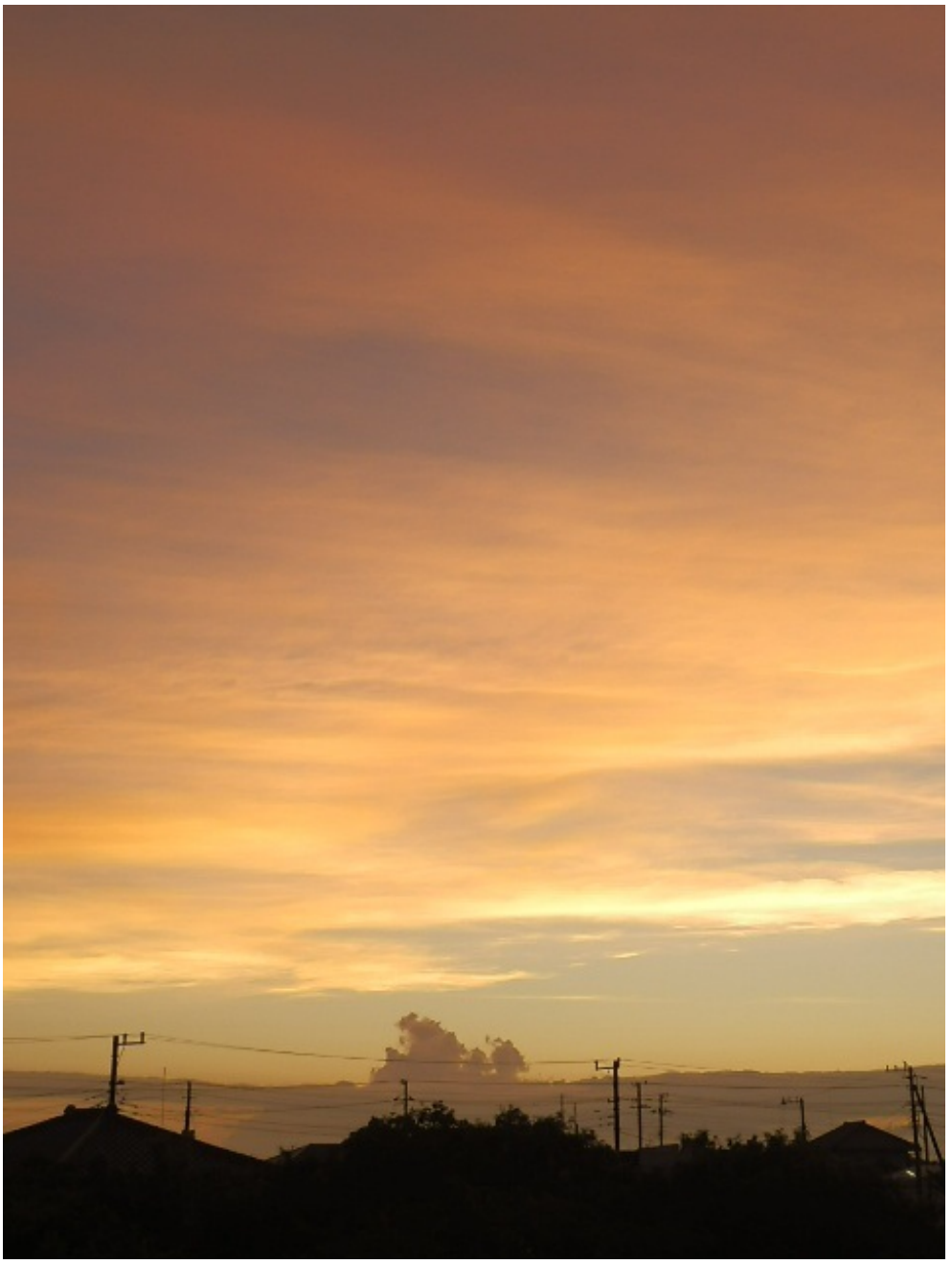
http://www.ibaraki-airport.net/

8月28日　12:19　茨城空港

雲もまた自分のやうだ
自分のやうに
すつかり途方にくれてゐるのだ
あまりにあまりにひろすぎる
涯《はて》のない蒼空なので
おう老子よ こんなときだ
にこにことして
ひよつこりとでてきませんか

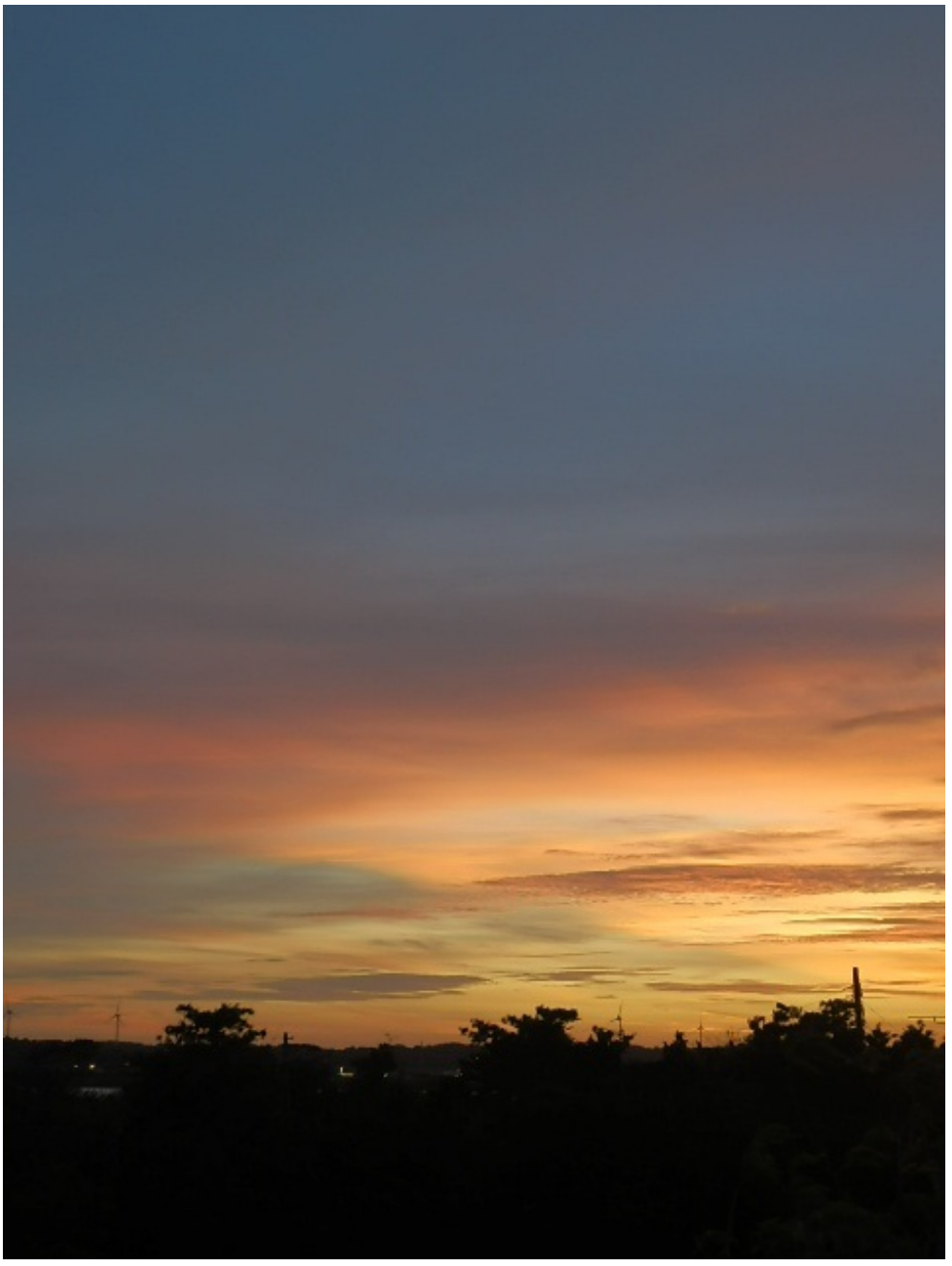
山村暮鳥

8月28日　朝焼け



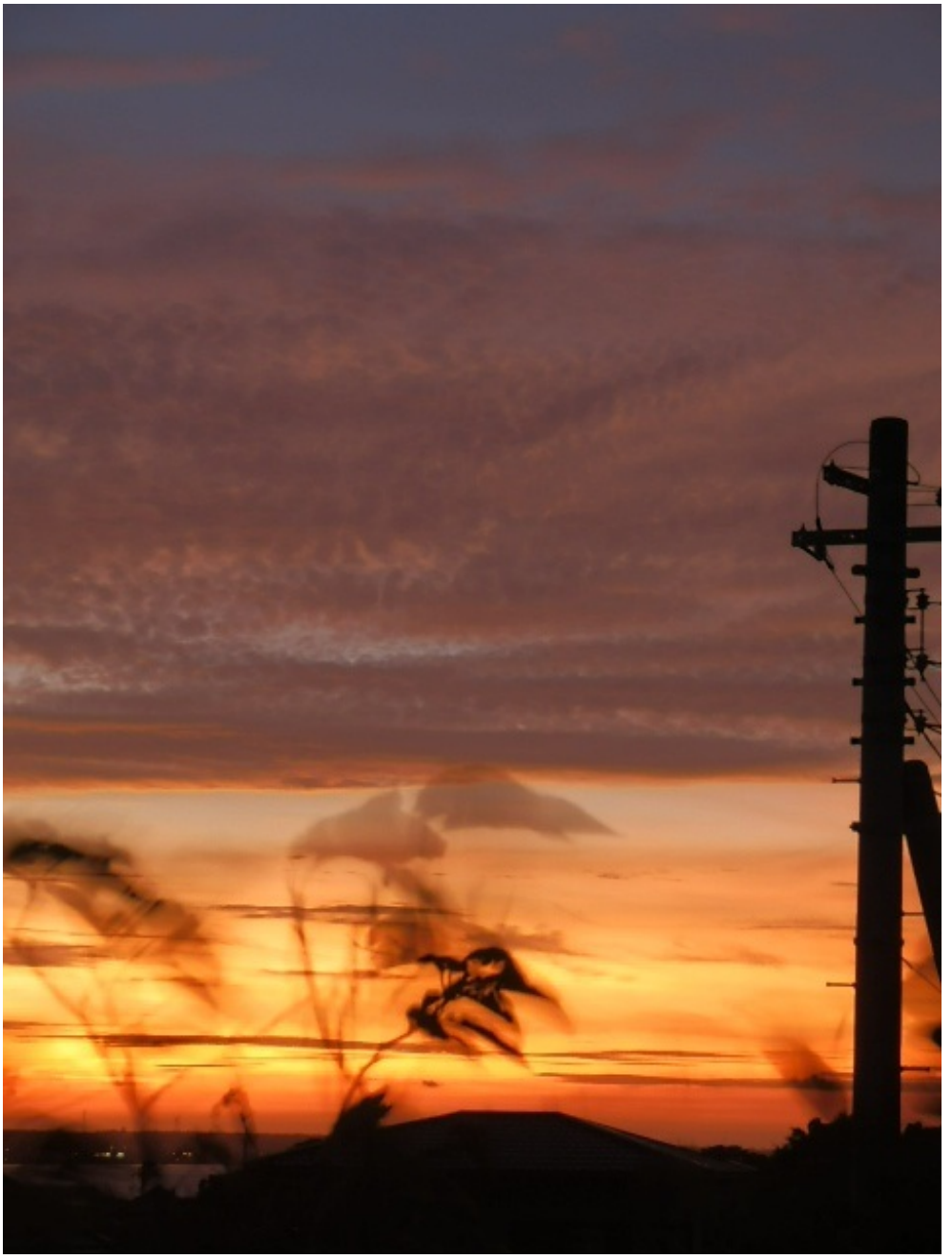
8月29日

8月29日



8月29日

風が強い日の夕方
手前で揺れているのは 桜の葉



8月29日

8月31日　一筋のひこうき雲

9月3日

9月3日

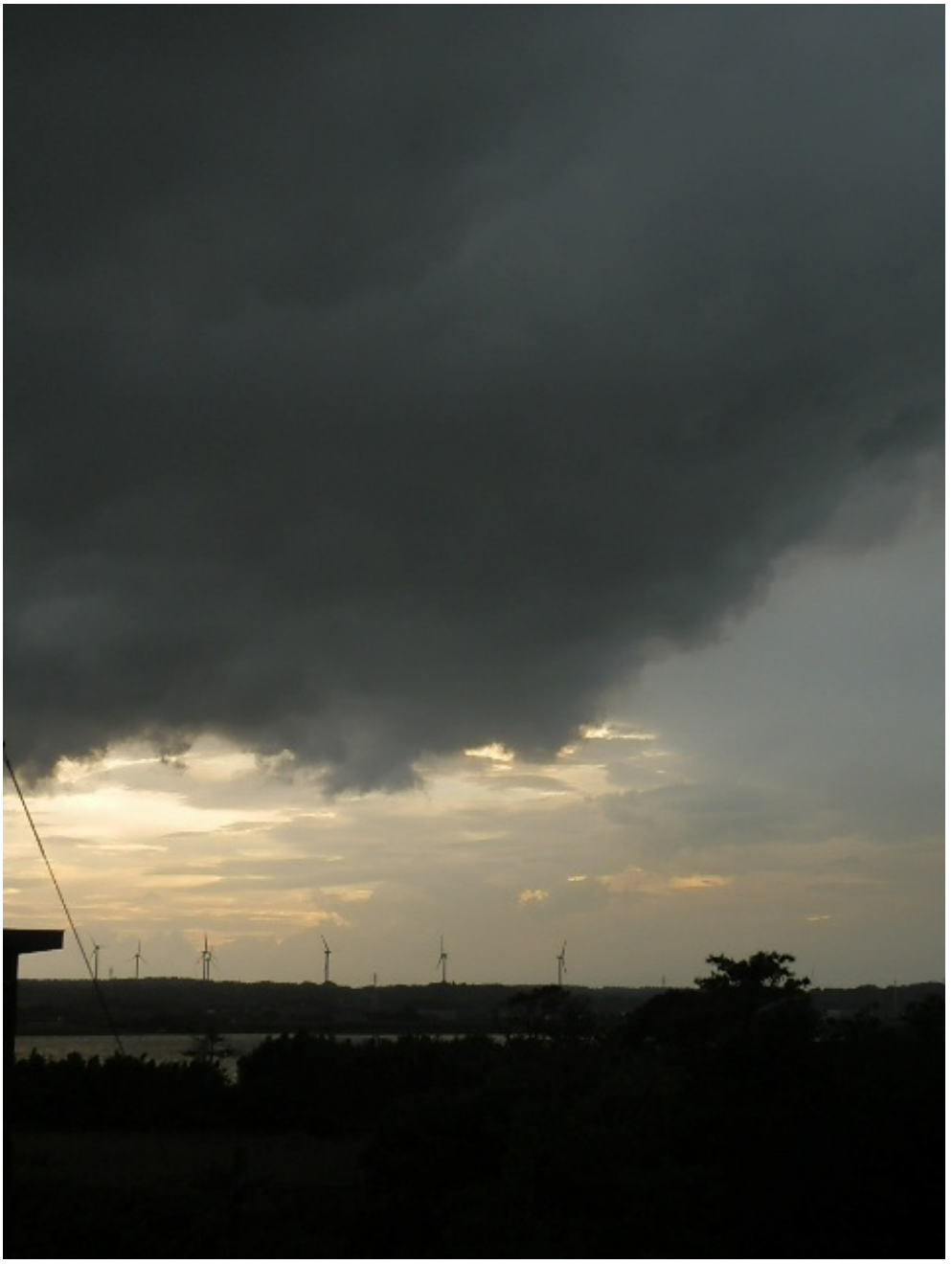
9月4日　4:38　明けの明星

写真右上の白い点が "明けの明星" （金星）です

9月6日　17:01

9月6日　17:14

真っ黒い巨大な雲の塊が猛烈な速さで写真右から左に‥‥



9月11日　11:40

自宅裏のオオシマザクラ越しに見た初秋の空

9月12日

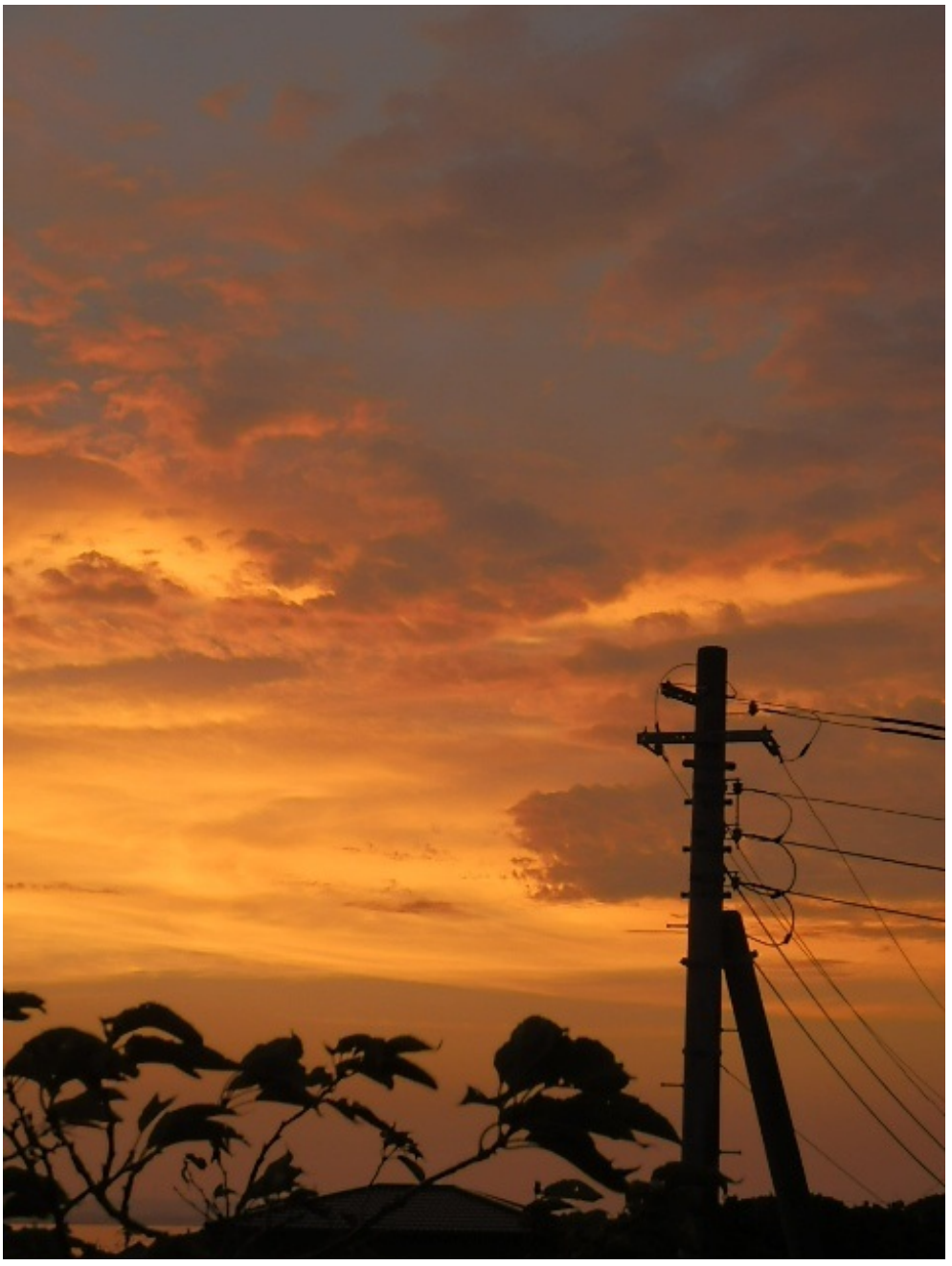
利根川を挟んだ対岸の町、沢山の風車が並んでいます
高い空に秋を感じる

9月12日　17:57

9月13日　17:56

自室北側の窓から見た綺麗な あかね雲

9月13日　17:59　あかね雲



太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ

一日の終りのその束の間をいろどつてゆつたりと
太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ
大きなうねりを打つて
いくへにもかさなりあつた丘の畑と畑とのかなたに
赤赤しい夕焼け空
枯草を山のやうに積んだ荷馬車がかたことと
その下をいくつもつづいてとほつた
なんといふやすらかさだ
此の大きいやすらかな世界に生きながら人間は苦んでゐる
そして銘々にくるしんでゐる
それがうつくしいのだ
此のうつくしさだ
どこか深いところで囁いてゐるこほろぎ
自分を遠いとほいむかしの方へひつぱつてゆくその声
けれど過ぎさつた日がどうなるものか
あした 何もかも明日のことだ
何もかも明日のことだ

山村暮鳥

9月15日　17:33　銀色から

西日を受けて銀色に輝く雲

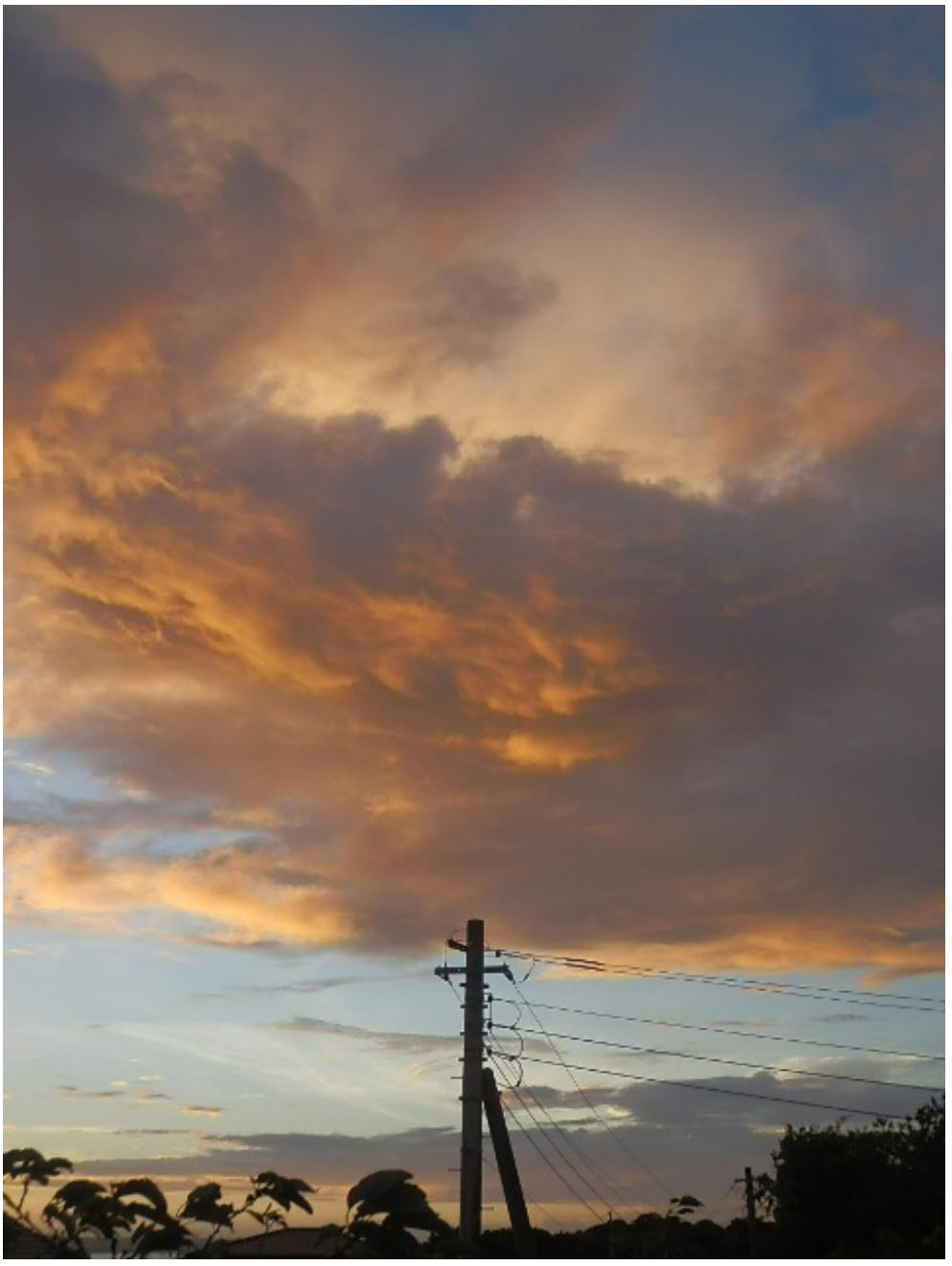
9月15日　17:50　金色へ

暫くして 見てみると色鮮やかな黄金色に

実際は、眩しいほどの金色でしたが
写真に撮ると 随分色褪せてしまいます

9月16日　10:03　一時戻った夏空

9月16日　17:40

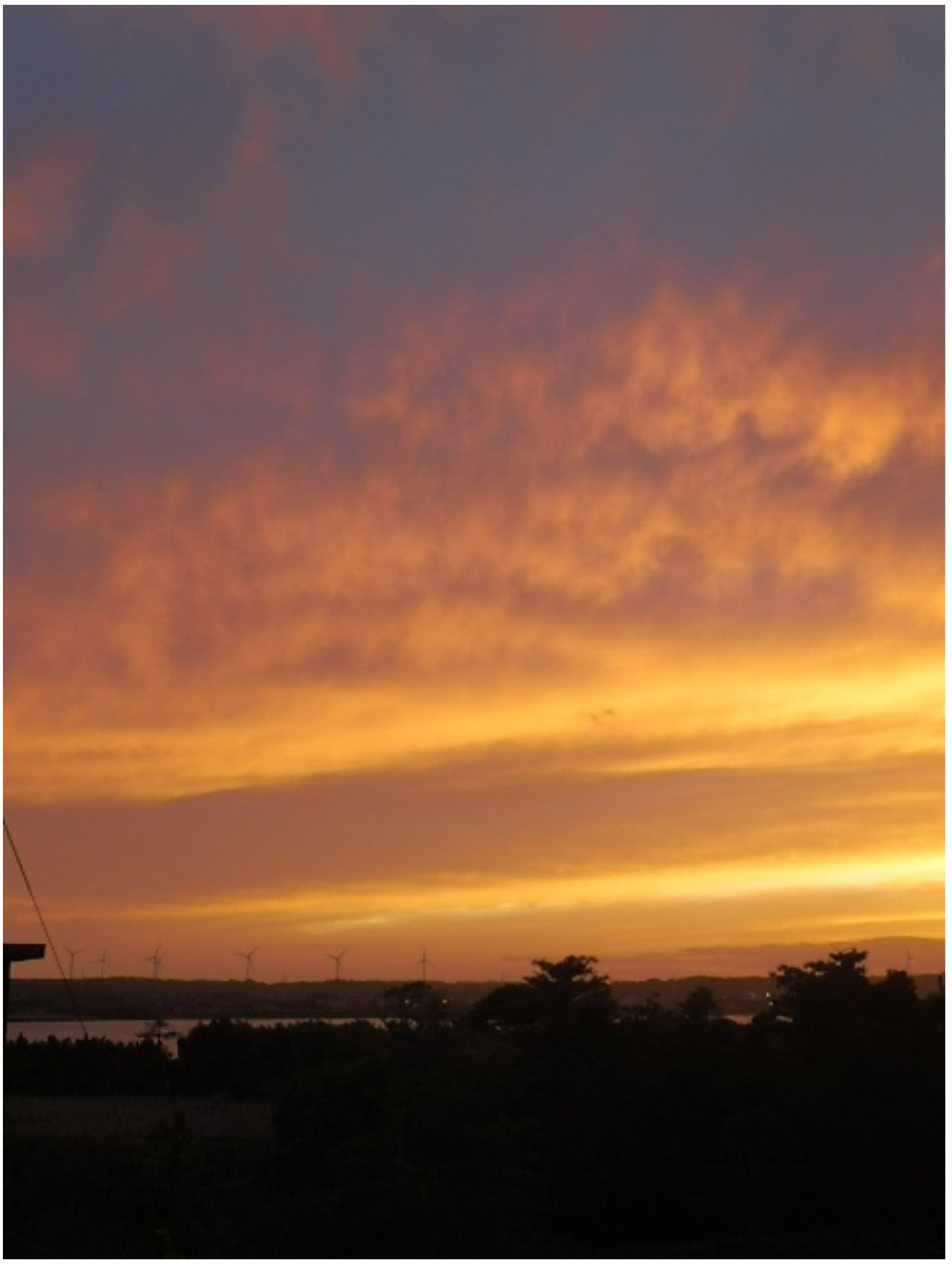


9月24日　11:12

9月24日　表紙に使用した写真です ^^

9月24日　17:15

9月25日　17:33　炎のような夕焼け



9月28日　16:57

9月30日　嵐の前の静けさ

この数時間後に、台風１７号が上陸、その後関東を通過して行きました

かなしさに

かなしさに
なみだかき垂れ
一盞の濁酒ささげん。
秋の日の水晶薫り
餓ゑて知る道のとほきを
おん手の葦
おん足の泥まみれなる。

山村暮鳥

10月4日

10月6日　8:19

10月6日　17:07

10月7日　16:55

10月8日　17:32

10月9日　11:49　茨城県 袋田の滝 上空の雲

10月9日　12:33　懐かしい風景

草木をわたる秋風と
わたりどりの翼の陰影《かげ》と
わたしの溜息
そしてもろこしばたけでは
もろこしが穂首を低く垂れてゐる
その穂首からは
黄金色の大粒な日光の
なみだのやうなしづくが
ぽたりぽたりと地に落ちてゐる
ほたりぽたりと……

山村暮鳥

10月9日　12:33　茨城県の田舎道

昔は日本のどこにでもあった里山の風景

10月9日　12:38

10月9日　15:58　茨城県立カシマ サッカースタジアム

青空に

青空に　魚ら泳げり。

わがためいきを　しみじみと　魚ら泳げり。

魚の鰭　ひかりを放ち

ここかしこ　さだめなく　あまた泳げり。

青空に　魚ら泳げり。

その魚ら　心をもてり。

10月13日　8:06

10月13日　8:38

10月13日14:36

10月13日　14:46

10月13日　16:20

10月15日　6:15

十月
銀魚はつらつ
ゆびさきの刺疼き
真実
ひとりなり

山あぎやかに
雪近し。

山村暮鳥

10月15日　8:14

10月15日　8:22

10月18日　8:18

10月18日　13:27

10月20日　16:31

10月22日　10:22

10月22日　13:35

雨は一粒一粒ものがたる

一日はとつぷりくれて
いまはよるである
ゆふげ
晩餐ののちをながながと足を伸ばしてねころんでゐる
ながながと足を伸ばしてねころんでゐる自分に
雨は一粒一粒ものがたる
人間のかなしいことを
生けるもののくるしみを
そして燕のきたことを
いつのまにかもうすやすやと眠つてゐる子ども
妻はその子どものきものを縫ひながら
だんだん雨が強くなるので
播いた種子が土から飛びだしはすまいかと
うすぐらい電燈の下で
自分と一しよに心配してゐる

山村暮鳥

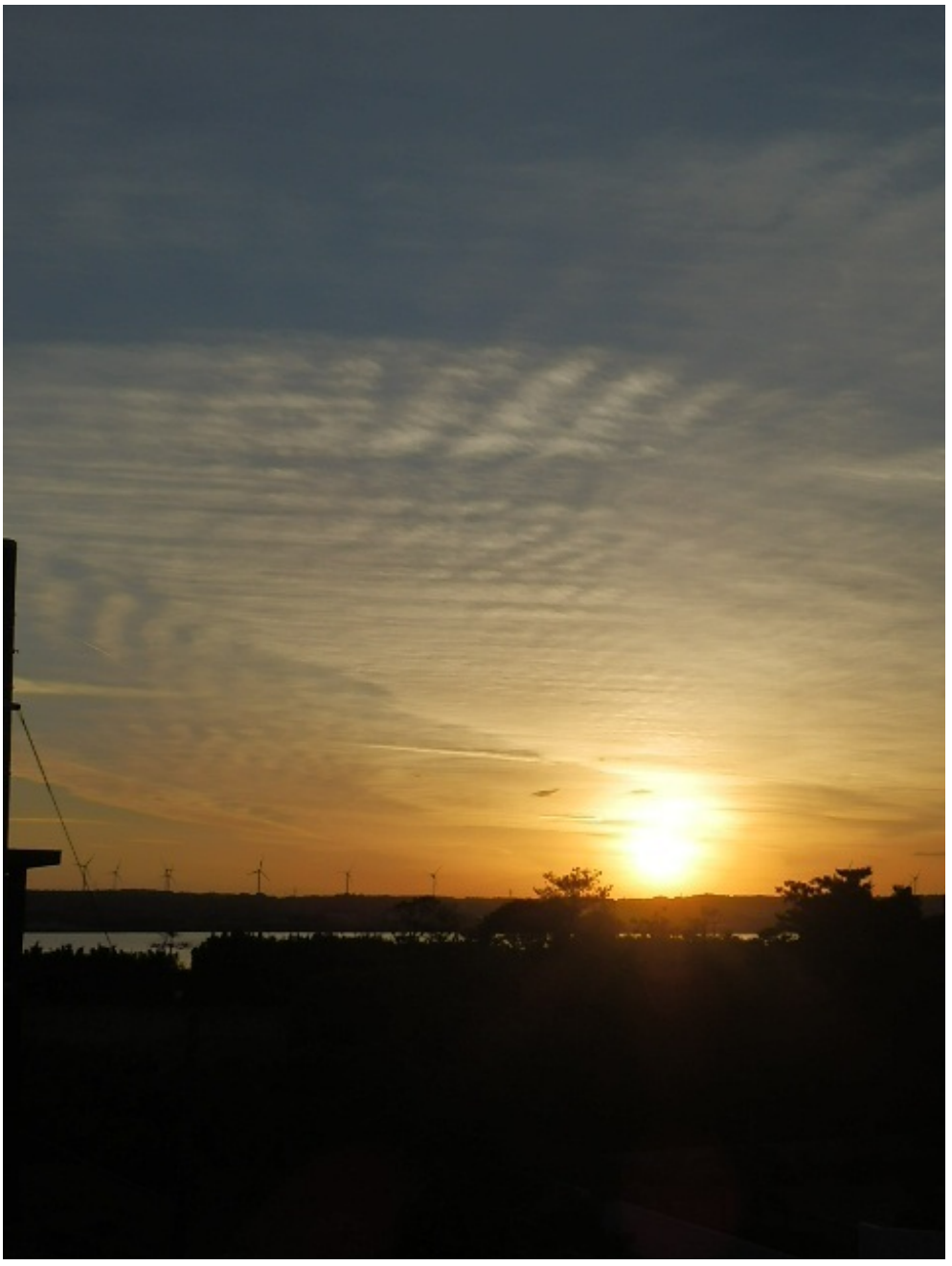
10月25日　16:04

10月25日　16:10

10月25日　16:33

10月25日　16:36

10月25日　16:37



10月25日　16:37　そろって夕日ウォッチング

手

しつかりと
にぎつてゐた手を
ひらいてみた

ひらいてみたが
なにも
なかつた

しつかりと
にぎらせたのも
さびしさである

それをまた
ひらかせたのも
さびしさである

山村暮鳥

10月26日　15:46　自宅庭から西に向かって

10月26日　16:47

右端に ひこうき雲 が‥‥。

10月26日　16:48　　これも雲

夕日の色に染まった ひこうき雲

10月27日　6:12　利根かもめ大橋の上からの日の出

10月27日　6:15　光のシャワー

10月27日　11:43　新 銚子大橋

10月27日　11:43

10月27日　11:43

10月28日　10:08　利根かもめ大橋の上から

10月30日　16:26

10月31日　7:21

山村 暮鳥（やまむら ぼちょう）
1884年（明治17年）1月10日 - 1924年（大正13年）12月8日）
明治・大正期の詩人、児童文学者
本名、土田八九十（つちだ はくじゅう）、旧姓は志村

1884年1月10日、群馬県西群馬郡棟高村（現在の高崎市）に生まれる。
父・木暮久七、母・志村シヤウの長男。
父は、西群馬郡元総社村の農家・木暮巳之吉の二男で、暮鳥が生まれた当時まだ志村家に未入籍。
母方の祖父・志村庄平の二男「志村八九十」（しむらはくじゅう）として、出生届け。
弟妹にアサ、リウ、仁才、雪江、涼、百合子、明石。
1889年、父・久七が祖父・庄平との確執に耐えきれず千葉県佐原町に出奔、
母もその後を追って志村家を出たので、八九十は叔父・木暮作衛に預けられる。
後に父母が元総社村に戻り住むに及び、引き取られ、5月1日、父・久七の養子として入籍。
貧困の中で少年期を過ごす。
1899年に堤ヶ岡尋常小学校（現在の高崎市立堤ヶ岡小学校）の代用教員となる。
働きながら前橋の聖マッテア教会の英語夜学校に通う。
1902年、同教会の婦人宣教師ウォールの通訳兼秘書として青森に転任。
1903年、東京都築地の聖三一神学校に入学。
神学校在学中より詩や短歌の創作をはじめ、前田林外らの雑誌「白百合」に木暮流星の筆名で短歌を発表。
卒業後はキリスト教日本聖公会の伝道師として秋田、仙台、水戸などで布教活動に携わる。
1909年、人見東明から「静かな山村の夕暮れの空に飛んでいく鳥」という意味をこめて
「山村暮鳥」の筆名をもらう。
1913年7月、萩原朔太郎、室生犀星と、詩、宗教、音楽の研究を目的とする「にんぎょ詩社」を設立。
1914年3月、同社の機関誌「卓上噴水」創刊。
1913年12月、教会の信者や知人達を中心に「新詩研究会」を結成。
機関誌「風景」には萩原朔太郎、室生犀星の他、三木露風らが参加。
1919年、結核のため伝道師を休職。
1924年12月8日、茨城県大洗町で死去、40歳。

自然のあらゆるものに神を見いだす彼独特の神学は、しばしば熱狂的な信徒を怒らせ、
異端として追放された事も数多くあったという。
萩原朔太郎は「彼自身の見たる如き、ちがつた意味での基督教を信じてゐたにちがひない」と、
追悼文『山村暮鳥のこと』で述べている。